九つの影

百川雅比古

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
九つの影

【Ｎコード】
Ｎ３０５７Ｋ

【作者名】
百川雅比古

【あらすじ】
夏休みを直前に控えたある日の夜、彼女がレイプされて妊娠した事実を知った大学生の男が、八人の親友に力を貸してくれと頼む。頼まれた八人の親友は、皆で力を合わせて男の辛い心持ちを何とか回復させようと、そして何とか事件を解決しようと奔走する。
だが、あまりに凄惨な結末に九人の男たちは強烈な思い出を大学生の夏に作ることとなる。
そして、それが昇華されたカタチとは・・・？

夏休みを直前に控えたある日の夜であった。猿沢池のほとりにある「五十二段」と呼ばれる石段に九人の若い男たちが集まった。歩いて来る者、自転車で来る者、バイクで来る者、車で来る者…様々である。それぞれの男たちは互いに顔を見ても軽く手を挙げるだけで言葉はない。石段に一人の男が腰掛けると、それに合わせるように全員がしゃがみ込んだ。

九人の男たちは中島洋平からの電話で「大事な話がある」とだけ言われて呼び出された。その理由は誰にも知らされなかった。しかし、いつもは明るい中島の口調が沈んでいることから、何か大事な相談があるのだろう、ということはそれぞれが察知していた。

夜になっても蒸し暑い夜である。夜空には薄い雲がかかっていており、月や星は時々光を見せる程度である。緩やかに風が吹いているが、九人の身体を涼ませるほどのものではなかった。

「何やねん？大事な話って…」

芹沢好弘がタバコに火をつけながら石段に座る中島に問いかけた。しかし中島に反応はなく下を向いているだけである。

「早よ言うてくれ。俺、さっきまで寝てて眠たいねん」

と村川敏光がぶっきらぼうに、また急かすように言った。

「……みんなに聞いて欲しいことがあんねん…」

ようやく中島が今にも消えそうな声で呟いた。

「何や？」

興味津々に身を乗り出して佐藤貴史が聞いた。

中島は一点を見つめてそっと、そして強く手を組んだ。やがて薄い雲がかかった夜空を見上げて、誰とも目を合わせずに語り始めようとした。他の男たちはそれぞれの動きを止めて中島の方を向き、その話に聞こうとした。

「…俺の彼女が……」

そこまで言うとうなだれた。少し震えているようにも見える。その様子が尋常でないと思った白井次郎が、
「彼女が、どないしたん？」
と小さな声で問いかけた。
「……妊娠した…」
中島は首をうなだれたまま言った。
その言葉を聞いた男たちはしばらく何も言えず、ただ湿気を含んだ風が九人の円陣を通り抜けていく。
「…お前、とうとうやってしもたか…」
渡部国光が沈黙に堪え切れなかったかのように言うと、中島は「違う！」と強い口調で否定した。
「何が違うねん？」
中居伸夫が宥めるように中島の肩に手を添えて言うと、中島はすすり泣きを始めてしまった。その様子を見て全員がただ事ではないということを改めて察知した。
中島は今にも嗚咽に至りそうな様子であったが、中居が励ますように何度も肩を軽く叩くと僅かに落ち着きを取り戻して言葉を続けた。
「……一ヶ月ほど前に…レイプされて……怪我も負わされて……それでも俺に気を遣って…言わなかった……彼女の友達に…初めてそれを今日、知らされた…」
全員、言葉がなかった。ただ好弘と村川が吸うタバコの煙が湿気を含んだ風に乗って九人の間をすり抜けていくだけであった。遠くから犬の鳴き声が聞こえる。
「……それで…俺たちに何ができるんや？」
佐渡賢治が明らかに戸惑っている様子で聞いた。目があちこちに泳ぎ、落ち着きがない。
「…犯人を捕まえたい…。ほんで…彼女を…こっちに引き戻したい…」
「ちょっと待て、犯人を捕まえたいってのはわかるけど、彼女を引

き戻したいってどういうことや？」
　横山修弘がすぐさま言葉を返すと、他の男たちも同時にうなずいた。
「…俺と別れたいって言うてるらしい…」
「何でまた？」
「…『洋平君の幸せを奪ってしまうから』って言ってたって聞かされた…」
「彼女、お前に気ぃ遣うてるんやな…」
「でも俺はどないしたらええんかわからへん…」
　中島がそう言うと、男たちは腕組みをして唸った。中島の痛ましい気持ちは把握したものの、想像がつかない。それでいて重大な話にただ呆然としているだけであった。相談を持ちかけた中島に対して自分たちに何ができるのかをそれぞれが思索していた。
「…せやけど…、『犯人を捕まえたい』ってことは、犯人はまだ捕まってないっていうことやな？」
　佐藤が聞いた。
「ああ。彼女も相手が知らない人だって友達に言うてたみたいや…」
　中島が首を垂れたまま言った。すると好弘と村川が分析を始めた。
「強姦傷害事件とちゃうんか…、こんなん凶悪犯罪やんか」
「ひょっとしたらストーカーかもしれへん。最近ここら辺も物騒やって話はよぅ聞くし」
「それに妊娠しているんやろ、早よ捕まえなアカンやろ」
「もしも、やで。もしも意図的に妊娠させたんやったらストーカー的な犯行の可能性は高い。ある意味で逃げられへんようにな」
「自分のものにしたい、ってことか。せやけど、もしそうやなかったら…？」
　村川の言葉に好弘が右手を顎に添えながら言葉を続ける。
「性行為上の、ある意味での“失敗”か…。まぁどっちにしろ犯人の責任は大きい」
「何にしても重大な事件やないか。警察に届けた方がいいんとちゃ

うん？」
「俺もそう思うで」
好弘の言葉に連鎖するように、他の男たちがうなずいた。
「中島、そのこと彼女に言うてみたか？警察に届けぇって」
村川が言った。
「彼女から直接聞いた話やないからそこまで聞けへん」
「ほなそれを聞くのが先決やで。でないと事を進めることはできひんやろ」
「でも…そんなん俺、よぅ聞けへんわ…」
「そりゃそやろなぁ…」
横山がため息混じりに言った。
再びしばしの沈黙が漂った。いつの間にか薄い雲はどこかへ流れ、月光が降り注ぎ、九人の影をぼんやりと地面に棚引かせていた。
しばらくして白井が言った。
「…その、法律的なことはちょっとわからへんけどさ、俺らみたいな第三者が協力するんやったらまず本人からのええって言ってもらわんとアカンのとちゃうん？もしそうなんやったら、俺らも協力するにできひんで」
「ま、確かにそやな」
好弘が同意すると、他の六人もうなずいた。
「そのへんをよぅ考えるにもホンマやったら時間が要るところやけど…、事が事なだけにそうはいかへんよな。まず中島がちゃんと判断して動いてから、初めて俺らが協力できるっちゅうことをわかって欲しい。事はそれからや。急がすわけやないけど、彼女の身体のこと考えたらそれが当然やと思うで」
白井は更に説得する。中島は辛い心持ちの上に急な判断を要され、惑いが強い様子であった。それを察知した渡部が割って入る。
「まぁまぁまぁ、ちょっと待ったれよ。今いきなり結論出せぇ言うたかて出やんやろから、今日はもう帰ってじっくり考えぇ。でも、できるだけ早よぅ決断せぇよ」

渡部が中島の背中をポンと叩き、肩にそっと手を添えた。湿気を含んでいる夜風を一度浴びて、中島は立ち上がった。そして乗ってきた自転車に跨って、最後に、
「みんな、頼む…ホンマ、お願いや…。今の俺には…お前らしか頼られへんねん…」
と言い残して、彼らに背を向けてゆっくりとペダルを漕いだ。
残った八人は中島の後ろ姿が視界から消えるまで見送った。八人にとって、その時間が途方もなく長く感じられた。
ようやく八人の視界から中島が消えると、渡部がみんなの方に向き直った。そして、
「さて、俺たちも…」
と言いかけると、全員、
「さぁ帰るか…」
と言った。
「待て待て待てっ！お前ら薄情やな！今から作戦会議に決まってるやんけ！何帰ろうとしとんねん！アホ！」
渡部が地団太を踏むような仕草をして言った。確かに、今までの重大な話を聞いた後にしてはあっさりしすぎている。
「ああ、せやな。…ここやと暑いし、虫も多いからどっか行くか」
すまない、と言わんばかりの顔をして好弘が気を取り直した。
「二十四時間営業のファミレスか喫茶店にでも」
「ほな二十四号線沿いにある『ファルア』に行こう」
「えー！歩いてきた人は佐藤か中居の車に乗ればええし、好弘はバイクやからええけど、自転車の俺らはどないすんねん？」
白井、横山、佐渡が不満そうに言った。この三人はここまで自転車で来ており、「ファルア」までは自転車で行くには少し遠い。
「ほな俺の家に自転車置いて来いよ。ほんでどっちかの車に乗ればええやん」
と渡部が提案した。
かくして八人は二十四号線沿いにあるファミレス「ファルア」を

目指した。

中島をはじめとする九人は全員中学時代の同級生である。また、横山を除く全員は大学生である。中島は奈良国際大学の三回生、好弘は京都文化芸術大学の三回生、渡部は南海大学の二回生、村川は大阪商科大学の二回生、白井は京都産経大学の二回生、佐藤は阪神大学の二回生、中居は大阪公立大学の三回生、佐渡は大阪科学大学の二回生、横山は専門学校を卒業してイタリア料理店の店員である。大学生たちの学年が違うのは浪人経験の有無によっている。

九人はそれぞれ違う学校・職場に行っていたが、家も近く暇な時間帯が似ていることから折に触れてよく一緒に遊んでいる。また、九人はそれぞれ信頼し合い、相談に乗り合ったりもしている。この日、夜にもかかわらず一人も欠けず中島のために全員が集ったのも九人の仲の良さゆえであった。

さて、一行は「ファルア」に着いた。適宜飲み物や食べ物を注文して、早速「作戦会議」が開始した。村川に至ってはメモを取り出してまるで書記である。

「こういう問題はまずは好弘から…」

渡部が司会者のように好弘を指名した。好弘はこれまでにも中島や佐藤、村川の男女関係に関する相談を受けて来ており、この九人の中では対策を立てることに長けていたためである。

「ほな、彼女から俺たちが協力することを許可してもらった、という前提で話を進めていくで」

「ＯＫ」

「まず警察への届け出。これは絶対や。刑事事件としての事件性の強い事柄やと思うし」

そこまで言うと佐藤が口を挟んだ。

「警察が関与するようなこと、俺らが手出ししてええもんかなぁ…？」

「うん、それはせやな」
好弘は至って冷静である。話は続く。
「犯人を捕まえるのは基本的に警察に任せるのが当たり前や。むしろ、俺たちは情報を頼りに通報することが役目やろ」
「なるほど」
「それから、中島が言ってた『彼女を引き戻したい』ってこと。それから中島が落ち込んでいるのを何とかしたいよな」
「でもそんなん俺らにできるんかなぁ…」
横山が眉をしかめて言った。
「…できひんかもしれんよ…」
好弘がタバコに火をつけながらそう言うと、渡部が少ししんなりとしたフライドポテトをつまみながら言った。
「もう一つ。もし中島が妊娠した彼女とヨリを戻して、更に出産するってことになったら…」
それを聞いた八人は黙りこくった。想像したくない事態である。
渡部は続ける。
「あいつもまだ三回生、そろそろ就職活動が始まっている頃やろ。俺らは浪人してるからまだ二回生やし、働いてもバイト程度や。出産するとなると何かと金がかかるんやろ。それも俺らが想像できる金額やないやん。かといって俺らは金銭的な援助は言うほどできひんし、あいつもその問題を解決することは難しいやろし」
「な、なんかえらいことに直面してるよなぁ…今更やろうけど、実感が湧いてきてしもた…」
白井が肩をすぼめて言った。確かにそうである。それに続いて村川が話を始めた。
「もっと問題なのは、中島の子やないってことやろ」
「確かに。尤も、彼女の方が産むかどうかもわからんけどな。普通は産まんやろ、そんなレイプ魔の子なんか。せやけど、中絶するってことになると妊娠しにくくなるっていう話も聞いたことがある」
「そら彼女さんもショック大きいに決まってるわ。迷惑かけたない

っていう気持ちがあるってことは、やっぱり中島のこと好きやからやろ。何ていうか、その、将来をちょっとでも考えてたとしたらさ。そんな状況になったら冷静なんかなられへんで」
「ほな整理すると…」
　それぞれが発言し合っているのを好弘が軽く遮り、村川が書いたメモを読みながら整理をし始めた。
「まず中島たちが別れるか別れへんか。別れたら中島の傷を広げんように、俺らができる範囲でフォローする。これくらいやったらある程度はできるはずや。ほんで別れへんかったら、今度は出産か中絶かっていう問題が出てくるやろ。中絶なら手術費用で金がかかる。もしその時点で犯人が逮捕されとったら慰謝料・治療費が出るやろから金銭的な心配はいらんかもしれんな。せやけど、犯人が逮捕されとらへんかったら場合によっては金銭的な援助を少しでもするかもしれん。で、出産やったら…」
　好弘はそこまで言って言葉を詰まらせたように軽く咳払いをした。想像したくない事態を改めて言うとなるともはや他人事ではない気がしていた。
「ここからが問題やな…」
　村川が神妙な面持ちで言った。他の者は言葉もない。
「まず中島が出産に賛成するか反対するかが問題になるな。せやけどここは俺らはノータッチ。あいつらの問題やしな。賛成するとは思えへんけど……仮に賛成してホンマに産むことになったら、これも犯人が逮捕されてるかされてへんかでちょっと状況が変わる」
「逮捕されてたらやっぱり金銭的にはマシなことになるんかな？」
　佐渡が聞いた。
「うーん、あんまわからへんけど、犯人の家族から慰謝料や養育費という形で保障がつくんかな？せやけど逮捕されてへんかったら…」
「そこまで来ると俺らじゃ太刀打ちできひんで。正直、全然想像がつかへん。法律の力を借りんと…」
「う～ん、ますます重大や……どないしたらええんやろ…？」

考えれば考えるほど、大変な事件に直面しているという実感が込み上げてくる。俺たちに一体何ができるのだろうか。何もできないのだろうか。八人とも、得体の知れない不安な気持ちが胸中を占めた。

「まあまだ具体的な案もできてへんし、中島が彼女に俺らが協力することを言って、彼女からの反応がないと何とも言えん。それからや」

「とりあえず話はここで置いとこか」

「ああ。もしそれぞれが何らかの形で情報を得たりしたら処理していこう。尤も、難しいことかも知れんけど」

「そうやな」

それから八人は飲み食いしながら話を続け、未明に「ファルア」を出た。

渡部たちが「作戦会議」なるものをしている間、中島は彼女にいかに聞くかを自宅でずっと思索していた。だが、いつまでたっても決断が下せない。

中島は一人の力では到底解決できないものだと思っている。だから八人に相談を持ちかけた。しかし八人とも、彼女に真相を聞き、八人が協力することを許可してもらわないと協力しようがないと言う。中島にとって、その真相を確かめること自体が怖いのである。

もちろん、八人が二の足を踏むのもわかるし、彼らが適切に解決策をひねり出せる可能性は決して高いとはいえないこともわかっている。彼らを頼ることはまさに藁をも掴む思いだった。

部屋の灯りもつけず、ベッドの上で何度も考え、考えていく果てに涙を流した。中島には、しなければならないことをするのが怖いことなのである。

窓から僅かに差し込む月光が部屋を青く照らす。時折通りがかる車のヘッドライトが映し出す影が天井を左右するのを見つめながら、

幾度もの辛い気持ちの波を感じながら、中島はいつしか眠りについていた。

その夜、中島は嫌な夢を見た。得体の知れない「何か」がどこまでも、どこまでも追いかけてくる。でも捕まらない。だからずっと逃げなければならない。眠っているはずなのにすごく疲れる。

まるで、闇夜の森林を走り抜けているようだった。灯りの一つもなく、手がかりも何もない場所。枝葉をかすめる度に腕や顔にできる僅かな傷が重なり、血に染まっていく。

八人の名前を、そして彼女の名前を叫んでもこだまにもならず、ただ無情に響き渡っては、得体の知れない「何か」が肥大していくだけだった。まるで、中島の叫びを食い物にしていくかのように。そんな夢にうなされていた。

明くる朝、中島は早朝に目が覚めた。目が覚めても、まだ考えていた。もう既に考えることに疲れてきた。ひどい頭痛がする。少し頭を冷やそうと思って最近買ったお気に入りのアーティストのＣＤをかけて再びベッドの上に勢いよく寝転がった。窓から差し込む朝日に埃が舞い散るのが映える。ベッドの上の中島は、まるで悲劇のステージに佇む主人公のようだった。

（一体、俺はどないしたらええんやろ…）

どんなに明るい曲が流れても今の中島には悲しく聞こえてしまう。朝の日差しと雀のさえずりだけが気楽に中島を取り巻いた。

中島の彼女である笠原由果は同じ奈良国際大学の三回生である。レイプされ、負傷し、妊娠したのは事実であり、親にもとても言えず親友の貴枝にだけそのことを話していた。由果は貴枝に「誰にも言わんといて。もちろん、洋平君にも」と釘を刺していた。しかし、貴枝はこんな重大なことを言わずにはいられず、こっそりと洋平に伝えていた。洋平が事件とこの事実を知ったのは、後にも先にも貴枝からの情報だけだった。

その事件から一ヶ月余りが経っていた。つまり、計算上では妊娠二ヶ月ほどである。由果は、まだ身体に見た目の顕著な変化はないが下腹部にやや違和感があるように感じていた。また、時々気分が悪くなっていたが、それは事件のショックなのか、悪阻なのかは由果にはわからなかった。自室の机の引出しに残っている妊娠検査薬のパッケージは、他の物に押しつぶされて端っこが歪んでいた。

由果は中島に辛い思いをさせ、幸せを奪ってしまうと思い、中島と別れたいと思っている。一方で、大切な人を失いたくないという気持ちもある。それに加え、辱めを受けた悔しさ、怒り、怖さ…様々なものが入り混じって、由果もまた不安定な気持ちになっていた。

由果が貴枝にだけ打ち明けたのも、藁をも掴む思いだった。長い付き合いの貴枝にはこれまでも色んなことで相談に乗ってもらっていた。慰めてもらいたかったし、貴枝ならば何か解決策を導いてくれるかもしれない、という期待もあった。

一方の貴枝は、由果からのあまりに唐突で重大な告白に戸惑いが強く、どうすることもできない無力感すら感じていた。自分にできることはただ話を聞くことだけかもしれない。貴枝もまた悩んだ。貴枝が出した一つの結論は、中島にこっそりとこの事実を伝えることだった。それを受けた中島がまた八人の友人にそのことを伝えたのは、事件発生から一ヶ月も経ったときだったのだ。

九人の男たちが五十二段に集まった日から三日後の日、由果は貴枝と共にドーナツ店で中島とのことを話していた。

「洋平君、そのこと知ったらがっかりするやろうなぁ…」

貴枝がドーナツを食べながら言った。話をいち早く聞き、驚き、悩んだだけに、また、誰にも言わないという約束を破っていただけに、甘いはずのドーナツもあまり美味しく感じていなかった。

「多分、がっかりを通り越してショックやと思う…まだ洋平君にはよう言えんわ…」

由果の言葉に貴枝は更に胸中が締め付けられた。
やはり、中島に言わない方がよかったのだろうか。いや、しかし、知らないこともまた中島にとって辛いことはないのでは…、と、貴枝の葛藤は続いていた。
「ちょっと聞きたいねんけど…言いたくないねやったら言わんでええねんけど、一体どこで…その…襲われたん…？」
貴枝が気遣いながら質問した。由果は、しばらく言葉がなかったが、小さな声で少しずつ口を開いた。
「……バイトの帰り道で……いきなり羽交い絞めにされて……気がついたら眠っていたみたいで……でもそれくらいしか…覚えてへん…」
「相手は一人？」
「…、多分」
「全く見覚えない人？」
「…多分全然知らない人やと思う」
由果の声が震えた。
「そうなんや…。ごめんね、こんなこと聞いて。思い出したくなかったやろうに」
貴枝がすまなさそうに謝ると、由果は
「ううん、いいよ…」
と首を横に振り、目頭を右手の指先で軽く押さえた。
「体、大丈夫？」
「今のところはね」
「親は何って言ってるん？」
「…その…ね、実はまだ…」
「えー！言ってないの？」
貴枝の驚きは声の大きさに比例した。店内の他の客の何人かが由果と貴枝がいるテーブルの方を向く。貴枝は慌てて口を押さえた。
「こんなこと言えると思う？」
不必要なまでに小さい声で由果が言った。

「う…うん、確かに。でも私には…」
「貴枝やから言えたんよ…。小学校以来の付き合いやし…」
「そうやなぁ…。かれこれ十五年になるんやね」
「長いなぁ」
由果の顔から少し緊張が解けたように見えた。貴枝は懐かしい話をして気を紛らわせようと思い、話題を続けた。
「小学校のみんな、どないしてんねやろなぁ？」
「さあ…ほとんど連絡とってへんからなぁ…。大学にも同じ母校の人はいる様子ないし」
「あ、そうそう、この前大村君とか香苗とかに会ったよ」
「大村君って大村淳平？」
「うん、すっごくカッコよくなってたよ。そういえば昔、由果も憧れてたよなぁ」
「そんなこと言わんといてよ」
「あ、照れてる？」
「いや、別に」
由果の“淡々とした”応えに貴枝はクスリと笑う。その顔を見た由果も、少し表情が和らいだ。
「あと秋穂にも会ったよ。京都の大学に行ってるみたい」
「懐かしいなー。私も会ってみたいな」
「一応携帯の番号聞いたし、今度一緒に会おうよ」
「そやね」
二人はしばらく幼い日の思い出を語り合った。

同じ頃、好弘と村川と白井はよく行く喫茶店で話していた。
「なあ、俺さぁ、やっぱり中島のこと、関わるのが何か怖いわ…」
白井が言った。「怖い」という言葉を使っているが、白井にとってどうすればいいかわからないことが不安なのである。
「まあこんなこと言うたら中島に悪いけど、まだホンマかどうか確

かやないやん。心配が取り越し苦労に終わることを祈るけど……、多分そうはいかん」
村川は神妙な顔で返す。
「まだ俺らどころか、中島でさえ状況をはっきり掴めてるわけやないしな」
好弘がタバコの煙を吐き出しながら言った。
テーブルには三つのコーヒーと灰皿、そして村川が「作戦会議」の時に書いたメモが乗っていた。三人の視線はそのメモに集中する。見れば見るほど現実であって欲しくないとの気持ちが強くなる。三人にとって経験したくないことである。
「もしやで、もしこれがホンマでさ、ほんで俺らがホンマに協力することになったら夏休みはこのことで潰れるんやろな」
白井がコーヒーカップに指を掛けながら言った。
「ま、夏休み言うても大した予定はないやろ。それくらいの時間は中島のために使ってみようや」
「だいたい俺らが協力して事が順調に進むもんかね？」
白井はあまり乗り気でないように言った。すぐさま、村川が立ち上がり
「お前なぁ、さっきから聞いてたらツレがこんなことに巻き込まれてんのにそんな言い方あらへんやろ！」
とテーブルを拳で叩いて切り返す。周りの客が村川たちのテーブルに注目した。
村川は続ける。
「アイツにしたら藁でも掴む思いなんやぞ。その気持ち、俺らが汲まんと誰が汲むねん！」
すると好弘が「ちょ、村川、落ち着け」と、なだめる。
村川がフンッ、と鼻息を出しタバコに火を付けると、白井が「す、すまん…」とうなだれた。
三人のテーブルが沈黙に陥りかけたが、村川がタバコを半分ほど吸った頃に、白井に「俺もすまん、デカい声出して」と言い、話し

合いが続いた。
「まあ…今俺らがやらなアカンことは、中島が彼女に聞き出すってことを待つしかないか」
「そういうことやな」
「それにしてもあれから三日経つけど、結論出てるんかいな？」
「さあ？」
「メール入れても返ってこんし」
「電話かけてみるか？」
「そやな」
村川は携帯電話で中島に電話をかけた。長い呼び出しの果て、ようやくつながった。
「もしもし…」
電話に出た中島の声に精気がない。
「中島か？今な、白井と好弘といつもの店におるんやけど、コーヒーでも飲みに来んか？」
村川が軽く誘ってみたが、中島は「今あんまそういう気分やないわ…」と沈んだ声で返す。
「そうか……。ところで、まだ決断できて…？」
「…ない…」
村川は一瞬、ため息をついた。そして言葉を続ける。
「焦らすわけやないけど、彼女のこと大事に思うんやったら早よせなアカンと思うで。できるだけ、早くな」
「ああ、わかった」
「まあまた何かあったら連絡してくれ」
そこまで言って村川は電話を切り、白井と好弘に視線を送って鼻で小さくため息をついた。すぐさまタバコを口にくわえ、火をつけて深々と吸う。
「やっぱまだ聞いてへんのか？」
好弘が村川に聞いた。
「そうみたいやわ」

「じれったいな…まあしゃぁないやろけどなぁ…」
「ところでさ、二人とも中島の彼女って見たことあるか？」
白井が好弘と村川に聞くと、二人とも「いや」と言って首を横に振った。
「あー、そういえば大分前に一回見たけど、結構前やから感じとか変わってるかも」
「何や、二人ともないに等しいんやな」
「中島と同じ大学の人やっちゅうのは知ってるけど」
「奈良国際大学なんか」
「今度中島と会ったら写真とかで顔だけでも見せてもろとこか。全く知らんってのもナンやし」
「そやな」
「…さてと、俺らはこれからどないする？」
村川が伝票を持って立ち上がった。
「あ、俺はギャラリーに行く用事があるからこれで…」
好弘が言った。
「芸大生らしい予定やな。ほな俺らは適当にぶらぶらしとくわ」
「おう。ほなまた」
一人と二人はそれぞれ別れてそれぞれの道を行った。

翌日、佐藤と村川は中島の家を訪れた。何となく中島はやつれている様子だった。実際、食事も思うように取っていないようで、暑さと相俟って疲れの色が隠せない。また、あの晩から四日が経つが、一向に考えがまとまらず、決断も下せていなかった。
中島の部屋に三人、言葉もない。村川と佐藤が持ってきた菓子やジュースに誰も手を伸ばさない。中島は壁にもたれてうつむいているだけであり、村川と佐藤も強く腕組みして床を見つめているだけである。
重い空気、とはこのことだ。今の三人を写真に撮ると、どんなカ

メラを使ってもモノクロ写真になりそうである。
「……あのな、中島…」
沈黙に堪えられなかったのか、佐藤が小さい声で切り出した。
「俺、あの晩からずっと思ってたんやけど、お前がホンマに彼女のこと好きで、何かしてあげたいって思うんやったら今メソメソしてる場合やないと思うねん。お前は今、頼られてるんや。そのお前が何も行動せえへんかったら何にもならん。俺らがお前を支えようと思ってもお前がそんなんやったら何もできひんで」
村川がそれに続いた。
「俺も佐藤と同じ意見やな。俺らも何かできることがあんねやったらやりたいと思ってんねんで。せやから早くお前の中で結論出してもらわなアカン」
二人の言葉を聞いて中島は呟いた。
「……今日聞くよ…」
佐藤と村川が見合って小さくうなずいた。そして佐藤が立ち上がり
「その決断、冷めへんうちに行こう。俺、車出してくるわ」
と言って、中島の家を出て自宅に走った。残った村川は中島を立ち上がるよう促した。
「さ、行こうぜ」
中島は無言でうなずいた。
しばらくして紺色の小さな軽自動車に乗った佐藤が中島の家の前に来た。中島と村川が乗り込むと、佐藤が「とりあえず、どこに行ったらいい？」と聞いた。
「あ、由果に電話してみるわ。ちょっとだけ待ってくれ」
中島はそう言って由果に電話をかけた。
中島には呼び出し音が鳴っているだけの間も途方もなく長い時間に感じた。僅かな時間の中で、切ってしまおうか、とも考えた。
「もしもし」
「あ、由果？お、俺。洋平。い、今どこにいてる？」
不意を突かれたように由果が電話に出たので、中島は少し慌てた

口調で話す。
「今？近鉄奈良駅の方に来てるけど？」
由果は淡々と返す。
「そ、そうか。…あのさ、もしよかったら噴水前に来てくれへん？しばらく会ってなかったからちょっとでええからしゃべりたいねん」
「…うん、…いいよ。わかった。噴水前で待ってるわ」
中島が電話を切ると、佐藤は近鉄奈良駅の噴水前に向かって車を走らせた。
流れる景色は生まれ育った町並み。だが、今の中島には未知なる場所への隧道のようにさえ感じられる。中島の家から近鉄奈良駅まではものの十数分だが、途方もない時間にさえ感じられる。中島は後部座席で何度も胸に手を当て、容赦なく襲いかかる緊張感に必死で耐えようとしていた。
車は近鉄奈良駅の近くに到着した。
「中島、俺らはここで待ってるからな」
佐藤はハザードランプのボタンを押し、中島を送り出した。
車を噴水のすぐそばに停車させたので中島の様子がよく見えた。まだ由果は来ていない。中島は緊張しているのか、そわそわしていてどこか挙動不審だ。
「中島、あれじゃ緊張してんのバレバレやで…」
「ホンマ、まあいつでも挙動不審な感じやけどさ」
村川と佐藤が心配そうに噴水のそばに佇む中島を見る。
「お、あれ、彼女とちゃうか？」
村川が中島の前に女性が現れたことに気付いた。どうやら由果のようである。二人には中島の顔が少し穏やかになったように見えた。
「なかなか可愛いやんけ」
「あんな子がレイプされるなんて、かわいそうに…」
「ホンマや」
「そんな感想は置いといて、中島が肝心なことをちゃんと聞くかどうかやな」

「ここからはそれはわからんけど」
「まあ様子だけでも見とこ」
二人は中島の様子を見ていたが、見る限り単に二人で話をしているだけとしか見えない。しかも、その場所はやや遠景になるので表情も時折しか読み取れない上、しばらくすると中島と由果は歩きだして商店街のアーケードの中に入って行ってしまった。
「おいおい、見えなくなってしもたがな」
「ちょっとメールするわ」
村川が「俺らどうしたらいい？」と中島にメールを送信した。しばらくして中島から「ゆっくり座って話をする。話が終わったら連絡する」と返信があったので、二人はしばらく車で近隣を走って時間を潰すことにした。
中島と由果は商店街内にあるファーストフード店に入って話をすることにした。
中島は何とか不自然さを取り除こうと努力するが、意識すればするほど不自然になってしまった。話をしようと思っても話題が見つからず、由果と視線を合わせられない。いつもの中島と何だか違う、と察知した由果は中島にバレてしまったのではという懸念が込み上げてきた。
「…洋平君、何かあった？さっきからずっとそわそわしてるけど…」
「い、いや別に…（早く聞かなアカンのに…）ただ…（何って言うたらええんやろ？）ちょっと気になることがあって…（あー！ここまで言うてしもた！）」
「気になること？」
由果が眉をしかめて言った。同時に、バレてしまったのではないか、という懸念と緊張が急速に高まった。
「…（もう言うしかない！）由果、…お前、妊娠してるってホンマか？」
由果は驚きの表情のまま、言葉がなかった。
（な、何で知ってるの？…貴枝が言ったのかしら…）

「……それも、……レイプ…されて……何で俺に…言うてくれへんかったんや？」
　由果は下を向いたまま強く目を閉じた。あのときの恐怖と屈辱が込み上げ、また、知られたくない人に知られてしまったという焦燥で感情が一杯になってきた。
「……洋平君、ごめん……このままやと洋平君の幸せ奪うから……もう別れて…」
　中島は一番言われたくない言葉を言われ、更に落胆した。
（くそっ、ここで引き下がってたまるか！）
「…俺はお前のために何かしたい。俺一人じゃできないこともあるから友達にも協力してもらって……」
「いい！私、もういい！」
　由果は目に涙を溜めて大きい声で言った。他の客たちは何事かと思ったのか、中島と由果のテーブルに視線が集中する。しかし、二人にはそんなことはどうでもよかった。
　由果は大粒の涙を流しながら言葉を続ける。
「…私、…こんなことになってすごく悔しい…。犯人も捕まってないし……親にも言ってへんし…言えへん……警察に届けたら親にバレるのが怖い……でも中絶するためのお金もないし…もう、どうしたらええんかわからへん」
　由果の言葉を聞いて中島は佐藤の言葉を思い出した。
（お前がホンマに彼女のこと好きで、何かしてあげたいって思うんやったら今メソメソしてる場合やない）
（そうや、俺が、由果を助けなアカンねん…）
　中島は膝の上で拳を強く握って、一呼吸置いてから言葉を続けた。
「由果、中絶するつもりか？」
　中島が聞くと由果は涙を流しながら無言でうなずいた。
「心配するな。俺が何とかしてやる」
「で、でも…」
「俺が由果を助けへんかったら誰が助けんねん？」

「……」
「…もちろん、俺が一人でやるにも限界がある。友達にも手伝ってもらう。…せやから、別れる話はやめてくれ。それだけは頼む」
「……」
「…俺がいたら考えにくいやろから、もう行くわ…」
中島はそう言って立ち去り、村川に話が終ったから近鉄奈良駅の噴水前に迎えに来て欲しいとの旨をメールで伝えた。
しばらくして佐藤の軽自動車が姿を現し、乗り込んだ。
「…話、したか？」
「した」
中島は淡々と返した。目の周りには涙の痕が僅かに光る。
「どないやった？」
「俺は、ちょっとスッキリはした。でもこれからや」
「よう言うたな。…で、何か詳しい情報とかは？」
「特に…。中絶するということだけ」
「そうか…中絶するか…。今でだいたい一ヶ月と半ぐらいやろ。早めにした方がええやろ。中絶が認められている期間もあったはずやし」
「彼女には考えるように言うといた。せやから彼女からの結論が出てから協力して欲しい」
「ＯＫ」
「…これからやな」

それからしばらくは中島を除く八人はノータッチ状態であった。というのも、好弘はギャラリーで開催される大学の先輩の個展の手伝いがあり、村川、佐藤、白井は集中講義や補講があり、中居、渡部、佐渡は研究課題があり、横山は店の仕事があったためである。
その間、中島は何度も由果と話をした。親への告白、警察への届け出、八人の協力…。それぞれを早めに行なうことを促し続けた。

しかし由果はなかなか納得しない。
「なあ、何べんも言うけど、先送りにしとったら取り返しのつかんことになるんやで。由果は何も悪いことしてへんがな。由果は完全に被害者やねんで。被害者が泣き寝入りしてても何も解決せぇへんがな」
「…わかってる…。でも…」
「わかってんねやったら早よそうせな」
「そんな、急かさんといてよ」
「急かさへんかったらいつまで経ってもそのまんまやろ。それに、中絶すんねやったらお金はどないすんねん？」
「……そんなこと言われても…」
「せやから、由果は被害者や。由果は何も負担せんでええねん。保障されて当然の立場やで」
「…わかった、じゃあ三日だけ待って。三日考えさせて」
「三日後には結論は…？」
「絶対出すから。その間に少し気を楽にしたいの。ちょっと昔の友達とかにも会ってみたりしながら…」
「わかった。急かしてすまんな」
「…いいよ。私のこと、そこまで想ってくれてたの、嬉しかったから」
（よし、これで事は何とか進みそうやな…あとはみんながどう協力してくれるかやな）

その翌日の昼下がり、九人の男たちが揃って集った。例の「ファルア」に行き、本格的な「作戦会議」が開かれた。
「じゃあこの前のことを踏まえて考えていこう」
相変わらず渡部が司会者のように進めていこうとした。そして、村川のメモをもとに好弘が内容を述べていった。
「まず、警察への届け出。これは中島、彼女自身にきちんとするよ

うに言って欲しい」
「ああ。わかった。昨日、話したときには明後日までには結論を出すって言うてた。せやから、その時には通報することになると思うわ」
「犯人検挙は、彼女さんの目撃証言に基づいて警察が似顔絵とかを作るかもしれんから、警察の動きに合わせて、俺らが警察の協力をする形を取ろう。それでええよな？」
「直接とっ捕まえるのは？」
中居が言った。
「ま、それができるもんならやったらええ。せやけど多分難しいし、その大金星を頂戴するには警察を上回る捜査能力が必要やで。それに危険も伴う可能性は大や。命かけてでもできるんならやってみぃ」
「う…、ま、まあできたらやろう」
「続いて、中島のメンタル面やけど、とりあえず今は本人がいるから割愛」
「俺は大丈夫や。むしろ、彼女が中絶するときの援助の方が心配や」
「え？中絶するんかい？」
佐渡が驚いた顔で言った。
「そりゃそうやろ。レイプされた相手の子どもを産みたいと普通思うか？」
好弘が素早く切り返す。
「思わんやろなぁ…」
「となると金銭面か…」
「保障は出やんのか？」
「何か法律がありそうやけどな」
「俺らにはさっぱりわからん」
「まあその辺も警察に合わせて相談するのがええやろ」
「それやと俺ら、これと言ってすることないんとちゃう？」
佐渡が言った。確かに、警察に任せることが大半である。
「そうかもしれんな。まあ事態はいつどう変化するかわからん。そ

のときに必要になれば俺らも手出しさせてもらう。それでええな、中島」
「ああ。それでいい」
「よし、ほな今からどっか行くか。中島もしばらく憂鬱やったやろ。気晴らしにドライブ行こうぜ！」
中居がそう言って立ち上がった。全員、それに続き、会計を済ませて車に乗り込んだ。
車は三台。佐藤の軽自動車、中居の乗用車、好弘のバンである。佐藤の車に村川、渡部が乗り、中居の車に佐渡、白井が乗り、好弘の車に中島、横山が乗った。
行き先は若草山山頂にした。三台の車は一斉に走り出した。
二十四号線を北に上がり、大宮通りを抜け、近鉄奈良駅前を通過するときに中島が好弘に急に「停まってくれ！」と言った。好弘が慌てて急ブレーキを踏むと、その勢いで横山と中島がバランスを崩しかけた。
「危ねー！何いきなり停まっとんねん？」
横山が運転席の方に顔を突き出しながら言うと、中島は「由果や…」と呟いた。
「彼女さんか？」
「あの五人組のところ」
「あー、あの子なんや。…一人男がいるな」
「な、何やて？」
中島は車から飛び出していった。そして由果の方に駆け寄った。
「由果ー！」
「あ、洋平君」
「何してるん？」
「うん、小学校のときの同級生と遊んでんの」
中島は一緒にいた四人に目をやった。すると四人とも軽く頭を下げた。そのうち一人は貴枝で、貴枝と中島は友達なので軽く挨拶を交わした。

中島は小声で由果に聞いた。
「いや、実はツレの車に乗ってたんやけど、ちょっと見かけたモンやから…」
「そうなんや。今からどこかに行くの？」
「あ、ああ。ちょっとドライブに…」
「どこに？」
「若草山の山頂にでも行こうってことになってさ」
「あ、それからあのことやけど…明日きちんとするから」
「わかった。ほなツレも待ってるから行くわ」
「じゃあね」
中島は車に戻った。
「どないしたんや？」
「いや、由果が俺の知らん人らと一緒やったから、ちょっと気になってしもて…」
「どんな人らやったん？」
「小学校時代の同級生やねんて。そういえば前に『昔の友達に会う』とか言うとった」
「ほな大丈夫やん」
「ホンマ。焦らすこと言うなよ」
「お前が勝手に焦ってんねやんけ。お前、昔からそういうトコあるよな。些細なことをちょっと気にするトコな」
「すまんすまん」
再び車を走らせ、若草山を目指した。

一方、由果の方は、貴枝、香苗、秋穂、大村と小さな同窓会をしていた。
「由果、さっきの人が彼氏？」
秋穂が聞いた。
「うん、一応」

「いい人そうやね」
大村が言った。
「大村君は彼女は？」
「う～ん、特に…」
「モテるんとちゃう？」
「いや、それが全然。学科が学科やし」
「どこ行ってるん？」
「大阪の医療専門学校で診療放射線科やねん。女子も少ないしなぁ…」
「診療放射線なん？私、理学療法なんよ」
香苗が言った。
「何か医療メンバーやなぁ。私は外国語やから全然違うわぁ」
秋穂が言った。
「そんなん私なんか経営学部やで」
と由果。
「でも小学校時代ってありふれた夢言うてたなぁ」
「宇宙飛行士だとかスチュワーデスだとか…」
「そういえば『宇宙飛行士になりたい』を間違えて『宇宙人になりたい』って言うてた人もおったよね」
「誰やったか忘れたけど、おったおった」
「あの頃に言うてた夢をずっと追いかけてる人なんてどのくらいいるもんなんやろな」
「少ないんとちゃう？」
「俺はホンマは医者になりたかったけど…結局医学部には行けへんかったしな」
「でも近いことはしてるよね」
「昔は理学療法士なんていう仕事すら知らなかったけど」
「不思議なもんやなぁ」
五人は飽きることなく話し続けた。話題は色々と変わるものの、話が途切れることは全くない。やがて辺りは暗くなり、それぞれ帰

路についた。由果は貴枝と大村と帰路を共にした。
由果にとってこの小さな同窓会は大きな気晴らしになった。懐かしい話に、今抱えている大きな心配事を少しだけ忘れる時間を作ることができた。事情を知る貴枝も、香苗、秋穂、大村にはそのことを決して言わなかった。元々性格の明るい香苗、秋穂、大村は小さな同窓会を楽しく盛り上げた。
明日、中島と一緒に通報しに行こう。そう決意して由果は夜空を見上げた。その表情はどこか晴れ晴れとしていた。
「どうかした？」
大村が、夜空を見上げる由果に声をかけた。
「え？」
由果はちょっと驚き、大村の方を振り返る。
「なんか、急に上向いてるし、どうかしたんかなぁ？って思って」
「う、うん。ちょっと明日やらなアカンことを思い出してね」

九人の男たちは時間が経つのを忘れ、若草山山頂で暗くなるまで話をしていた。他愛もない話をたくさんし、まるで小学生時代のように山頂ではしゃぎ回った。暑い夏の日、九人は汗を流して笑顔を弾けさせる。
山頂から見える景色が夕暮れから夜景に変わった頃、九人の周辺はカップルが多数を占めた。男ばかり九人いるのも何だかいたたまれなく（？）なり、それぞれ帰路につくため車に乗り込んだ。
中島は好弘と話がしたいと言い、二人は国道沿いのラーメン屋に向かった。
「大分元気になったな」
好弘が窓を開けながら言った。
「ああ。ホンマありがとな」
「山頂でお前が『腹減った』って言うてちょっとびっくりしとってん。飯をあんまり食ってへんかったって聞いたから」

「なんかわからんけど、みんなと一緒におると安心するねん」
「そうか。それはよかった」
「明日、彼女が結論出してくれる」
「ホンマは結論は一つや。警察に届ける。ホンマはそれが先決やし、それが一番妥当でいい手段やろ」
「俺らが何をするかってこともこれから見えてくるんやろかな」
「ま、そういうことかもな」
やがて二人はラーメン屋に着いた。注文を待っている間も話を続ける。
「せやけど…犯人は絶対許せん」
中島が手元のおしぼりを強く握りしめて、小さな声ながらも力強く言う。
「それは俺も同感や」
「もし捕まえたらこの手で…」
「…この手で？」
好弘が中島の手元を見つめて言葉を返す。
「殺したいぐらいの気分や」
中島は拳を固く握って震わせている。
「…その気持ちもよくわかる。せやけどホンマに殺したらアカンぞ。お前が犯罪者になってしまうからな」
「それはわかってる。そのぐらいの気分っちゅうこと」
「まあせめてシバいといたらええんとちゃう？」
「そのつもりや」
「ほな明日から本格的に始まるな」
「ああ。何かあったら頼むで」
「ＯＫ」

由果は夜な夜な悩んでいた。まずは親に言わなければならない。そして警察にも届けなければならない。中絶の手術も受けなければ

ならない。自分は一切悪いことをしていないのに、なぜここまで苦しまなければならないのかという悔しさ、その苦しみを人に伝えることの怖さがたまらなかった。

その中で中島の気持ちは由果にとって大変嬉しいものであったが、その反面、申し訳なさが一杯だった。しかし、ここまで来たら徹底的に中島を頼るしかなかった。夜中であったが、中島に電話をかけた。すると眠たそうな声で中島が出た。

「もしもし…」

「夜中にごめん。…あのね、警察に先に届けてから親に言おうと思うんやけど、一緒に警察に来てくれへんかな…？朝十時に私の家の前に来て欲しい」

「ああ、そうか。うん、いいよ。一緒に行く」

「よかった。…私、…不安で不安で……今でも怖い…」

「…怖がることあらへん。大丈夫や。由果を支えている人はたくさんいる」

「うん、ありがとう」

「それじゃ明日に」

「おやすみなさい」

中島は眠気が消え、天井を見つめながら手を頭の後ろで組んで考えに耽った。

（ついに由果も動きだしてくれた……これからや。これから始まるんやな…。俺が絶対に由果を守る…。絶対に…）

いつしか眠りの世界に到着していた。

翌朝、中島は早い時刻に目を覚ました。早朝とて暑さはかなりのものである。窓から吹き込む風も涼しさではなかった。早朝にもかかわらずけたたましくセミの声が響く。しばらくぼんやりと窓の外を眺めていると雀が一羽、ベランダの柵に止まった。何回か鳴き声を立ててすぐに青さを極めた空に飛び立ち、中島はその姿を目で追った。

（…雀は気楽やな…その気楽さ、ちょっと分けてくれ…）

昨晩には気丈に由果を守ろうと考えていたが、眠りを経るとなぜか気が萎えてしまう。
（眠さのせいかな…顔でも洗おう…）
中島は洗面所で洗顔し、用を足し、髪の毛の乱れを直した。台所に行って麦茶を一口飲み、部屋に戻ってパソコンを起動させるとメールボックスにメールが届いているのがわかった。開いてみると佐渡からであった。
＜体壊してへんか？ところで、さっきまでインターネットで色々見てたんやけど、その中に「強姦記録」なんていうサイトがあって、掲示板に強姦体験を綴っているのを見つけたんや。よく見たら、一ヶ月とちょっと前に奈良で強姦したっていう書き込みがあったから一応知らせといた方がいいと思って。ＩＰアドレスも何とか読み取れたから重要資料になるかもしれん。最悪の事態にならないことを祈ります。何かあったら僕にできることがあったらいつでも言うて。協力するから。佐渡より＞
（な、何？…まさか、…まさか由果やないやろな…？せやけど…これが資料になる可能性はある。幸い佐渡もＵＲＬを教えてくれたし、プリントアウトしといて警察に持って行こう）
やがて待ち合わせ時間の十時が近づいた。
（そろそろ行くか…）
中島は車で由果の家に向かった。中島の家から由果の家まで大体十五分から二十分ぐらいである。やがて由果の家の前に到着したが、由果の姿はない。時計を見ると九時五十二分を指していた。
（まだ早いか…。いいや、呼び出そう）
中島は携帯電話で由果に電話をかけた。しかし、何度かけても「電波の届かない場所にあるか、電源が入っていないか…」というアナウンスが流れるだけである。
どうも妙だと思い、車を降りて思い切ってインターフォンを鳴らした。すると由果の母親が出た。
「はい」

「あ、おはようございます、中島です」
「あ、中島君？由果なら朝出て行ったのよ。何か急用？」
「い、いや、ちょっと近くに来たもんで…、それならいいです、失礼します」
「ごめんね、また来てやって」
（何か嫌な予感がする……みんなを呼び出そう……）
中島は渡部に電話をかけ、できるだけ落ち着きながら詳しく状況を説明した。すると渡部は全員に連絡を取るので五十二段で待ち合わすように伝えた。
夏休みの午前中、普段の九人であれば寝ていることも多かったが、運が良いことに全員既に起きており、渡部の知らせを受けてすぐさま行動を開始した。
間もなく、九人の男が五十二段に集った。あの晩と同じように九つの影が揃った。
「みんな、朝からすまんけど、とりあえず簡単に話を説明するわ」
中島は強い口調で話し始めた。
「今日、俺と由果で警察に届け出るために朝十時に待ち合わせをしてたんやけど、由果の家まで行くと朝に出て行ったと言われた。電話をかけてもつながらへん。何かあったとしか思えへん。とりあえず由果を探したい」
「何か急展開やな…。わかった、色んなところ回って探そう。せやけど俺ら、彼女の顔を知らんねんけど」
中居が言った。
「お前ら全員に写メを送っておくわ。それを手がかりにしてくれ。ほんで、俺と横山、佐藤と渡部、中居と佐渡は車で探す。好弘はバイクで、村川と白井は自転車で探して欲しい」
「ＯＫや」
「せやけど闇雲に探したかてアカンやろ」
横山が言うと、渡部が即座に役割を振り分けた。
「じゃあ中島と横山は奈良国際大学に行ってみて。佐藤と俺は彼女

さんの家近辺…天理の方を。中居と佐渡は…車を使うようなデパートに。自転車グループはここら近辺を。好弘はそれをサポートしてくれ。何かあったらそれぞれケータイで連絡取り合うようにせぇよ」
「わかった。じゃあすぐ行こう！」
「午後の三時になったらまたここに集合な！」
九人四組はそれぞれに散った。

その頃、由果は真っ暗な空間にいた。気が付いて身動きしようと思っても手足がテープで縛られている。何かのディスプレイの光に照らされている人の輪郭だけが見える。
「…こ、ここは…ここはどこ…？」
「気が付いた？」
声は男の声である。
「…解いてよ…！…何でこんなところに…」
「…妊娠…してるね…嬉しいよ。僕の子どもだ…」
「あ、あなた、私を襲った…！」
「その通りさ。さて…君を僕のものにするための…儀式とでも言おうかな。それを始めよう」
「な、何をするつもり？」
「動くと怪我するよ…」
男は由果の腕を掴み、肘裏に何かを刺した。どうやら注射のようである。
「い、痛い…」
「これで君は僕のもの…」
その瞬間、由果の意識は別のものになろうとしていった。
（何を注射したの…？お願い、やめて…せっかく…今日……警察…に……そして……悔しさ…から……解き…放たれる…と……思った……の…に……）
遠ざかる意識の中、男の顔を一瞬であるが確かめた。

（……どうして……？）

九人四組、捜査は難航。手がかりが全くないことは大変厳しいことであった。

中島・横山組はようやく着いた奈良国際大学のキャンパスを手分けして探していた。各校舎をくまなく探すが、夏休み中ということもあり校舎内は誰もいない。二人の足音だけが響いているだけであった。

「なぁ、警察に言うた方がええんとちゃうか？」

横山が走りながら言うと、中島は

「俺がこの手で…、見つけ出したいんや！」

と返す。

佐藤・渡部組は天理市内を周り、道行く女の人を見つつ走ったが、似た影はあっても本人は一向に見つからない。

「あの人は…どう見ても違うよなぁ…」

「地域絞ったところでやっぱり闇雲やで」

「くそっ、もっと有力な手がかりがあったらええのに」

「せめてどこに向かったか、方角だけでもわかれば違うのにな」

中居・佐渡組はかれこれ三つ目のデパートの中にいた。地階から最上階まで回るとさすがに疲れる。

一方、村川・白井・好弘組は町外れのコンビニの前にいた。自転車にしてはかなりの距離を走っており、午後に差し掛かるとかなりの暑さに苦しめられていた。

「…手がかりナシってのはキツいよなぁ…」

「ホンマ」

「焦れば焦るほどパニックや」

村川、白井、好弘が呟いた。

「ちょっと無理があるよな…今更気付いたことやけど…」

「はぁっ、ずっと走りっぱなしで疲れた…」

村川が座り込んでタバコに火をつけた。好弘も同じくタバコに火をつけ、白井は既に半分まで飲んだジュースを一気に飲み干した。
しばらくすると白井が妙に遠くを眺めるような目をした。
「どないしたん？」
「…あれ…彼女さんとちゃうか…？」
「どこ？」
「あれ」
白井が指差した方向には男女二人組みがいた。その女の方の顔をよく見ると、中島が全員に送った写メとよく似ている。
「間違いないかもしれん…」
「…絶対そうや、偶然やけど、一度会ったときにあの服に見覚えが…」
「せやけど男と一緒ということは…」
「浮気か？」
「まあええ。俺、とりあえず尾行してみるわ。ゆっくりついて来てくれ」
村川がそう言って自転車に跨った。
「ＯＫ」
三人は尾行を始めた。女は男に支えられながら歩いている。
「何か女の人、フラついてへんか？」
「何か妙やんなぁ」
「絶対、何かありそう」
そうこう言っていると、その男女は停めてある黒い軽自動車に乗り込もうとした。
「あ、ヤベっ！何とか止めろ！」
「俺が行く！」
村川が自転車で急いだ。そして、車に乗った二人のもとに行って訊ねた。
「ちょっ、ちょっとすんません。あなた、笠原…由果さんですよね？」

女は、もとい由果は驚いた顔で、無言でうなずいた。
「俺、中島に頼まれてであなたを探していたんですが…」
「逃げろ！」
隣にいた男が由果を車に引き込み、急発進した。その勢いに巻き込まれそうになった村川はよろめいた。
「好弘！追いかけてくれ！」
村川が叫ぶが早いか、好弘が爆音とともに猛烈なスピードで車を追いかけた。
（相手は軽自動車、こっちは改良した二輪、勝負にもならんぞ！）
元々、暴走族に近いことをしていた経歴のある好弘はあっという間に追いついた。しかし、道が狭く回り込めない。
（くそっ！絶対、止めてやる！）
交差点に至ったときに車は左折しようとしたがその一瞬の隙に漬け込んで左折を防止し、直進を余儀なくさせた。そして袋小路の農道に誘い出し、行き止まりで停車させることに成功した。
好弘が運転席に近づくと、男は窓を開けた。
「逃げたな！逃げたっちゅうことは疚しいことがあるっちゅうことや。もう逃がさんで！逃げたところで追いつくかどうかはもうわかっとるやろ」
好弘が強い口調で問い詰める。
「一体何ですか？僕が何かしたっていう証拠があるんですか？」
「じゃあさっき訊ねられたときに、なんで逃げたんや？」
「あの人が悪者に見えたからですよ！あなただってそうです！」
好弘はともかく、村川はさほど「悪者」に見える風貌ではない。
「とにかく出て来いや！俺が悪者に見えようが見えまいが関係あるかボケ！オラァ！出て来んかい！」
好弘はドアを開けて無理矢理男を引っ張り出し、胸倉を掴んで道端に突き倒し、顔の横に足を叩きつけて逃がさないようにした。そのときに村川からの報告を受け、一番近いところにいる佐藤・渡部の組から電話がかかった。

「もしもし、見つけたぞ。連れ出したヤツも一緒で今シバいとるわ。場所は南古市から西に向かってしばらく行った少し大きめの田んぼ沿いの道。袋小路になってるところや」
「大体の場所はわかった。すぐ全員向かうわ」
「ＯＫ」
同じ場所に間もなく白井と村川が到着した。
「好弘、ナイスやな。お手柄やで」
「まあな。…彼女の様子を見ておいてやってくれ。こいつは逃げられへん」
村川が由果を車から降りるよう声をかけた。由果は素直に従った。
「もう少ししたら中島が来るから…」
白井がそう言うと、由果は顔を青ざめさせた。
「…洋平君が…」
「ああ、さっき電話したらあと十分ほどでって」
「…私、逃げる…！」
「ちょ、ちょっと！」
「会いたくない！もう洋平君はいい！別れる！」
「ま、待て待て！」
村川と白井二人がかりで引き止めた。
そうこうしている間に全員が揃った。由果は車から降りてきた中島の姿を見て目を伏せた。
「由果…一体何があったんや？」
「あなたとは別れる…！」
「な、何でや！今日警察に行くて言うてたやないか！」
「もういい！もうどうでもいいの！放っといて！」
「おい、何か様子が変やぞ」
中居が言った。
「妙に興奮してる」
「何かおかしないか？さっきまではむしろ大人しかったのに」
村川と白井が言った。

「こいつが何か知ってそうや。吐かすか。」
好弘が足で男を突付きながら言うと、他の者は全てうなずいた。
「おい言え！何も知らんわけがあらへんやろ！言えやこの野郎！」
好弘が胸倉を掴んで強く問い詰める。
「信じてくれ！俺はホンマに何も知らん！」
「ウソつくなや！知らんわけないやろ！」
中居も強い口調で参戦する。
「お、俺はボスに頼まれて待ち合わせ場所まで連れて来るように言われてやっただけや！」
「ボス？…黒幕がいるんか？それは誰や！」
「…言わん」
「言えや！言わんかったら…わかっとるやろな」
好弘だけでなく、全員が指を鳴らし始めた。更に、九人の中で最も体格のいい佐渡が男の髪を引っ張った。すると男は恐れをなし、白状した。
「お、大村淳平や！」
「大村？」
「誰やそれ？」
「俺は知らんなぁ…？」
「おい！その大村はどういう奴や！」
好弘が胸倉を引っ張ってそう訊くと、由果が
「私の小学校時代の同級生よ！今私が一番愛してる人」
と叫んだ。
「な、何！」
中島の表情が一変した。もはや、怒りの表情である。
「お前、浮気しとったんか！」
「浮気やないわ！今日好きになって、今日あなたを嫌いになっただけ！」
その言葉に中島の脚が崩れた。佐渡が支えてようやく立っているだけである。

「…彼女の心変わりが何か衝動的というか、唐突で不自然というか…」
好弘が言った。
「何か尋常やない」
「お前！何かしたな！」
好弘が再び男の胸倉を掴んで極めて厳しい顔をして問い詰めた。
「そ、そこまでは知らん！ホンマや！」
「まだとぼけんのか！なめとんのかコラァ！」
好弘は激高して男を殴り倒した。
「おい、車の中捜してみろ」
渡部が言うと、
「お、おい！やめてくれ！」
と男が焦って懇願した。しかし、佐渡と中居はそんなことも聞かず、後部座席を物色して出てきた物は…
「ノートパソコンや…」
「起動させてインターネットのブラウザを見てくれ」
佐渡が言った。
「なぜに？」
「中島、あのメールに書いたＵＲＬはわかるか？」
「あ、ああ。プリントアウトしたから…」
佐渡が探索してみると、ブラウザの記録にあったＵＲＬと一致した。
「記録があるな…。あの記事に投稿されたＩＰアドレスも……このパソコンと一致するぞ」
「何の記録？」
白井が聞いた。
「情報収集でネットを見てたら、強姦記録っていうサイトがあったんや。奈良で実行したっていう投稿があったから、チェックしておいたんや」
佐渡がそう言うと、男は「くそ、バレたか…」と小声で言った。

「おい、コイツ認めやがった。あとは黒幕やな」
「それはそうと、彼女さんは大丈夫かよ??」
中居がそう言って由果の方を見ると、由果は目を血走らせて逃げようとした。
「ちょ、ちょっと！頼むからここにおってくれ！」
渡部が腕を引っ張って止めた。
そのときだった。由果の左腕に注射の痕のようなものが見えた。
「お、おい…。これ…」
渡部は由果の左腕を強く引っ張り、肘裏を指さした。
「…注射の痕っぽくないか？」
「ま、まさか…ヤク？」
全員が息を呑んだ。
「…ありえる…。…そういえばこないだ見たテレビで、覚せい剤が俺らくらいの歳のヤツらにも出回っているとか…」
「それで大村とかいう奴に心変わりを…？覚せい剤でそんなことになるんかよ？」
「わからへんけど…もしそうやったら大事件やぞ…！警察に連絡した方が…！」
「待ってくれ！」
中島が叫んだ。
「何でやねん？早よせんと…」
「このままやと由果が薬物やってると思われて捕まるんとちゃうか…」
「そんなん調査が進めば事情がわかるやろ、俺らの手に負えへんで」
「…その前に…黒幕をこの手で…」
「お前、殺すつもりか？」
「場合によってはそれも…」
「アホなことやめろ！お前も犯罪者になりたいんか？」
好弘が中島の胸倉を掴んで語気強く言った。
「犯罪者になってでもこの恨みを晴らしたい」

「お前アホか！そんな間違った晴らし方はやめろ！せっかくここまできたのに！」
「じゃあせめて黒幕を殴る！それで一挙に警察に連行する」
「まずはここで通報するのが先決やと思わへんのか？」
「頼む！」
全員、言葉がなかった。
「別にええ、俺一人で行く！」
中島は好弘の手を振り払い、足早に車に乗り込もうとした。
「待て待て！わかった！お前一人やとヤバいから俺らも行く！」
佐藤と渡部が押さえた。
「じゃあこの男を縛り付けて、彼女さんも錯乱してるからちょっとかわいそうやけどそうしよう。それでその大村がいる待ち合わせ場所に行こう」
「よっしゃ！」
「おい、待ち合わせ場所はどこや？」
好弘が男に強く聞いた。
「…山の辺の道の天理の方に…」
「騙すなよ」
「…わかってる…」
一行は山の辺の道を目指した。
男の説明で到着したところは人どころか車さえ殆ど通らないような山道であった。そこには五人の男がいた。好弘が近づき、「大村淳平はどいつや？」と聞くと一人の男が挙手した。背の高い、筋肉質のいかにも強そうな、そして端正な顔立ちをした青年である。他の四人の男たちも身なりの整った、エリートのような雰囲気を持つ青年たちである。
九人と五人が向かい合った。
「…あなた、この前会いましたね」
大村が中島に問いかけた。すると中島は無言でうなずく。
「お前は絶対に許さん！」

中島がそう叫ぶと、五人の男は大きなバタフライナイフを取り出した。
「げっ！」
「ぶ、武器を持っとる…」
「怯むな！行くぞー！」
中島が先頭を切って走り出した。他の四人に目もくれず、大村に向かって拳を振り上げた。
八人も続く。
壮絶な戦いが始まった…。

しばらくすると、道には九人が倒れていた。大村側の四人は全て倒され、佐藤、白井、中居、渡部、横山が斬られたり蹴られたり、あるいは殴られたりして体を傷めた。道には少しであるが血がついている。
中島と大村が向かい合った。中島の後ろには村川と佐渡が構え、バイクに乗ったままの好弘が控えていた。
「一つ聞く。お前、由果に何をした」
「…僕を愛させるための儀式をしただけだ」
「その儀式は何やねん？」
「それは言えない」
「クスリ、使ったやろ？」
「……」
中島の問いに大村が無言になった。観念したのか、大村側の倒された一人が「そうだ」と小さな声で呟いたのが中島の耳にも届いた。
「…村川…、由果をここに連れてきてくれ」
「え？」
「早く！」
村川は由果の手と座席を繋げた紐を解き、中島と大村のもとに連れてきた。

「由果！お前は薬物に汚されたんや！目を覚ましてくれ！」
「知らないわ！あなたなんか知らない！」
「由果！思い出せ！…お前は昨日やっと苦しい呪縛を解こうと決断したんやないんか！」
「そんなことは無意味よ！」
「今のお前がどんな状態かわかってるんか！」
「今が一番幸せな時よ！あなたなんかにそんなこと言われる筋合いはないわ！」
「それならなぜ右手の薬指に俺が渡した指輪が今もあるんや！」
「え…？」
由果は指輪を見つめて恍惚とした。頭をゆっくり左右に振り、膝は音を立てんばかりに震えていた。
「う、うう、うわあああああ！」
由果は大きい泣き声を上げ、大村に向かって駆けた。そして大村の手からナイフを奪うと中島の腹めがけて刺そうとした。
「そうはさせん！」
佐渡が体当たりしてそれは避けられた。大村がその間に中島を殴ろうと胸倉を掴んだが、村川が大村のわき腹を鋭く蹴った。
ふらつきながら渡部が立ち上がった。そして落ちていたプラスチックのパイプで大村を攻撃する。しかし弾かれて渡部は大村のボディブローを食らって再び倒れた。その瞬間、好弘はバイクを急発進させ、横から大村にキックを入れると大村はよろめいて倒れた。
「もうこれまでよ！」
由果がナイフを持って中島に向かって歩み寄る。そして激しい叫びと共に中島に体当たりした。
「中島ー！」
「やめろー！」

中島の意識はそのままだった…。

「中島ー！」
…、倒れたのは由果であった。錯乱状態にあり、体当たり直前に手を滑らせて刃を自分の方に向けてしまったのだ。
「ゆ、由果！」
中島が問いかけても返事はない。由果の腹部から鮮血が溢れ出てくる。
「由果ー！」
「おい！救急車や！」
「警察も！」
人気のない道で、多くの男と、一人の女が倒れた。
やがてその道は赤いランプで照らされた…。

若者乱闘　一名死亡、十四名重軽傷
男女関係の争いか
薬物所持容疑も
翌日の新聞の地方面の見出しであった。
結局、九人の中で渡部が全治一ヶ月で最も重傷を負い、続いて好弘が全治三週間の傷を負った。中島は足を強く捻挫して約二週間の怪我。他の男達は一週間から十日間の怪我であった。
大村ほか四名と由果を拉致した男は全員治療後に逮捕されることになった。現行犯では傷害容疑、薬物取締法違反容疑、銃刀法違反容疑などであったが、余罪（本来ならこれが本件であるが）として強姦致傷容疑、拉致監禁容疑など、様々な罪が問われることになった。
由果は、大村に強姦され、妊娠した。そして、再び拉致されて薬物漬けにされ、ほとんど自分の意識がないまま死んだ、…というよりかは殺された。
あれから数日経ったが、まだ中島には由果の死を告げられていない。もうすぐ知るであろう。中島以外の八人の男達は渡部が入院す

る病室で「作戦会議」を練っていた。
「…どえらいことになってしもた…」
ベッドの上で渡部が呟いた。
「せやから早よ通報せえ言うたのに…」
中居が低い声で言った。
「あいつ、絶対立ち直れへんぐらいショック受けると思う…」
「ところで中島は？」
「今検査中や」
「かなり殴られたからな」
「いや、捻挫したぐらいらしいで。念のために、骨に異常がないかどうかを検査してんねやろ」
「あいつまだテレビも新聞も見てへんやろ」
「見せるのがかわいそうや」
「でも、知らないのはもっとかわいそうや」
「確かに」
「まぁとりあえず、俺らは全員正当防衛が認められたから良かったよ。ここまで身体張って逮捕されたらシャレにもならん」
「いや、あの最初にとっ捕まえた男が全面供述しているのが幸いや。…それはともかく、中島のことや」
「ああ、そやな」
「あいつ、絶対ショックやで」
「立ち直れへんで」
「自殺するかも…」
「リアルなこと言うな」
「でもありえる」
「それは避けないとアカン」
再びドアがノックされた。入ってきたのは中島だった。
「中島…」
「みんな、大丈夫か？」
「ああ、何とか」

「…外、ちょっとだけ出れるか？」
「え？」
そう言って中島はじめ、九人は外に出た。
強い日差しである。
「…こないだの新聞、見た」
中島がポツリと呟いた。
「…見た、か…」
好弘が弱く反応する。
「…この空の上に…由果が……」
「…いるんやろな…」
「強い日差しや」
「…彼女の、強い思いなんかな…」
九人は立ち上がった。その日差しが地面に九人の影を落とす。
「由果は…光になったんかな…」
「きっと」
「そやなかったらこんなに強く照りつけへん」
「…それだけ中島を思っていたんや」
「…なあ、『ちいちゃんのかげおくり』って覚えてるか？小学校時代の国語でやったやつ」
「ああ、覚えてる」
「あれ、やってみようぜ」
九人は自分たちの影を凝視した。そして一斉に空を見上げた。すると九つの影は青空に浮かび上がった。
「おおっ！」
「なんか懐かしいな、これ」
「…ああ」
九人はいつまでも青い空を見つめた。九人の目には、九つの影がはっきりと空に飛び立っていくのが見えた。

それから三年が経った。
九人はそれぞれの道に歩み始めた。
中島は消防署員になり、日々人命救助に体を張って頑張っていた。佐藤は観光会社に勤め、研修の為に海外を飛び回っていた。白井は情報通信関連の企業に就職した。好弘、村川、渡部、佐渡、中居はそれぞれ行っていた大学の大学院に進学した。横山はイタリア料理店の店長になった。
九人とも今でも傷跡が残っている。特に重傷を負った渡部は時折痛むようである。傷跡を見るたびにあの戦いと悲劇を思い出す。
夏休みを目前にしたある日、好弘は大学院の研究室で個展計画を立てていた。奈良のギャラリーを借り、「芹沢好弘『影の飛翔』展」を開催することになり、具体的なレイアウトを構想していたのである。
小さなギャラリーで開催することもあり、展示できる作品の数は限られている。好弘は当初から十の作品を展示することに決めていた。
レイアウトが概ね決まっても、最後の十個目の作品だけはなかなか仕上がらない。いくつもの画用紙が「失敗作」として破棄された末、ようやく納得のいく作品が仕上がったのは、計画を立ててから実に一年半以上が経ったときだった。

個展が開催された。初日が休日だったので他の八人とも幸いにも出揃えた。一番にギャラリーに訪れた中島、渡部、村川、白井、中居、佐藤、佐渡、横山はその作品展示のレイアウトを見てすぐに意図がわかった。
「…なるほど…」
「何となくやけど、わかる」
「思い出深いよな」
「この作品にあの全てが詰まってる」

「何か考えさせられるものもある」
「少なくとも俺たちにとって白眉や」
「他の人に分けられないものやな」
「ここは不思議な空間や」
八人はそれぞれ好弘の作品を「感じた」。
ギャラリーには十の絵が好弘の計算に基づいて展示されている。入り口から順に、壁に八つの絵が展示され、九つ目は床に置いてある。その丁度真上の天井に十番目の絵がある。更に、それぞれの絵の額縁に青い紐が通され、それぞれがつながっている。
「みんなには説明するまでもないと思うけど、一応説明するわ」
好弘がそう言うと八人は椅子なり段差なりに座って好弘の話を聞いた。
「入り口から順に掛けている八つの絵は俺たちが中島と由果さんの為に何かをしていた時間的経緯に基づいている絵画。全て水彩です。雑然と描いているのは雑然とした俺たちの行動を表現しています。九つ目の絵は、病院の外で俺たちが『かげおくり』をしたときの影を描いています。そして天井にある絵は由香さんの肖像画。全ての絵は青い紐で他の全ての絵につながっています。これは時間の流れや空間の同一性、更に精神的なつながりを表現しています。青い紐を選んだのは『かげおくり』をしたときに見た空がとても青くて綺麗で、それが印象的だったからです」
一通りの説明を聞いて、中島が呟いた。
「好弘、俺たちの経験をこんな素晴らしい作品にしてくれて、ホンマにありがとう…。俺、これ以上幸せなことはない。由果もきっと喜んでくれている。でもな、…好弘の意図に反していたらすまんけど、もう一つ、あると思うねん」
「何や？」
好弘をはじめ、八人が中島の方を向いた。
「全部の絵が他の全部の絵につながってる、ってことは、九つ、つまり『九人』が一つ、つまり『一人』に収束されているように思え

る。九人が一人の為に一致団結したからあの夏があった。九つはつまり一つに向けられていると思う」
全員、言葉がなかった。ただただ中島が感じたことに感嘆していた。そして、再び十の絵を見つめなおして、あの夏を思い出した。
「…また、送るか…？」
好弘が呟くと全員立ち上がり、ギャラリーの外に出た。
九つの影はくっ付いて一つになり、そして一つの影を青空に送った。
青空に映った大きな一つのかげおくりはまるで由果の輪郭を描いているようだった。
九人は少年の顔をしていた。
地面には動かない九つの影が夏の日差しに棚引いていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3057k/

九つの影

2010年10月8日12時25分発行